



火山を種々の機器で観測
郷土館の裏にあります

追分宿郷土館での教養講座2・3に参加
災害について学びました

群馬大学・内田陽子 * 学習内容を内田がまとめた

2026年8月3日・9日

南海トラフ地震は
他人事ではない。
日本はつながって
いる

→全国に大きな
被害が出る

平安時代887年南海トラフ地震で
大阪湾沿岸被害は甚大



さらに信濃国の大山が崩れ、大河
が溢れ、牛馬、人々の死体が丘を
成すほどであった
と古文書に記載

軽井沢町追分宿郷土館

「浅間山夜分大焼」の展示からわかったこと



天明3年浅間山大噴火の被害の絵画表現の比較



信濃国（長野側）は噴火の激しさ



上野国（群馬側）は鎌原土石なだれ・天明泥流

天仁元年（1108年：平安時代）の浅間山大噴火の被害
は長野や群馬側も火砕流で大きな被害



天明3年浅間山大噴火：軽井沢の消失＜上州の被害

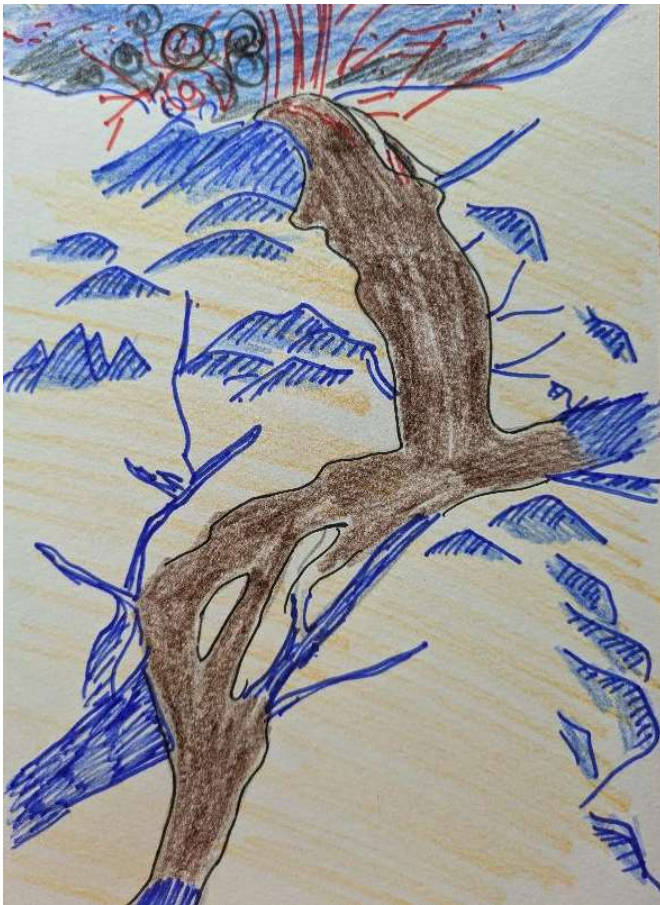
美才津家・丸山家の所蔵の
絵画には、浅間山が東に向
かって火や噴煙等をあげて
いる。手前は北国街道。

受け継がなければならない
という強い意思の表れ

天明3年の浅間山大噴火は群馬鎌原
では477人死亡、長野軽井沢では1
人死亡。群馬側に多大な被害。

火山口は群馬側に低く傾いている

浅間山焼吾妻川利根川泥押絵図から天明噴火被害をたどる



絵図は1856年（噴火から73年後）天明3年浅間山大噴火の全容を写した絵図

図は内田陽子が模写
浅間山が噴煙と共に火山雷が上がっている
そして土石なだれと泥流が流れている様子が描かれている



↑内田がまとめた動画
天明3年浅間山大噴火
と復興支援

お話から内田が まとめたこと： 泥流の被害

絵図だけでなく 遺跡の知見も踏 まえて学習

鎌原村は土石なだれに埋もれ、吾妻川へ流れ込み、村流失の記載がある

猿橋は吾妻溪谷にかけられた橋であるが、上流域では遺跡が見つかり泥流の被害にあった

中之条の付近では一・二・三ノ浪が襲ってきた

泥流は神社、杓ヶ橋、杓の関所も流される。流失後は渡し舟となり、船賃が復興資金になった

落合では吾妻川と利根川合流点、逆流して水が引いて人々が魚をとっていたところに再び泥流が襲う

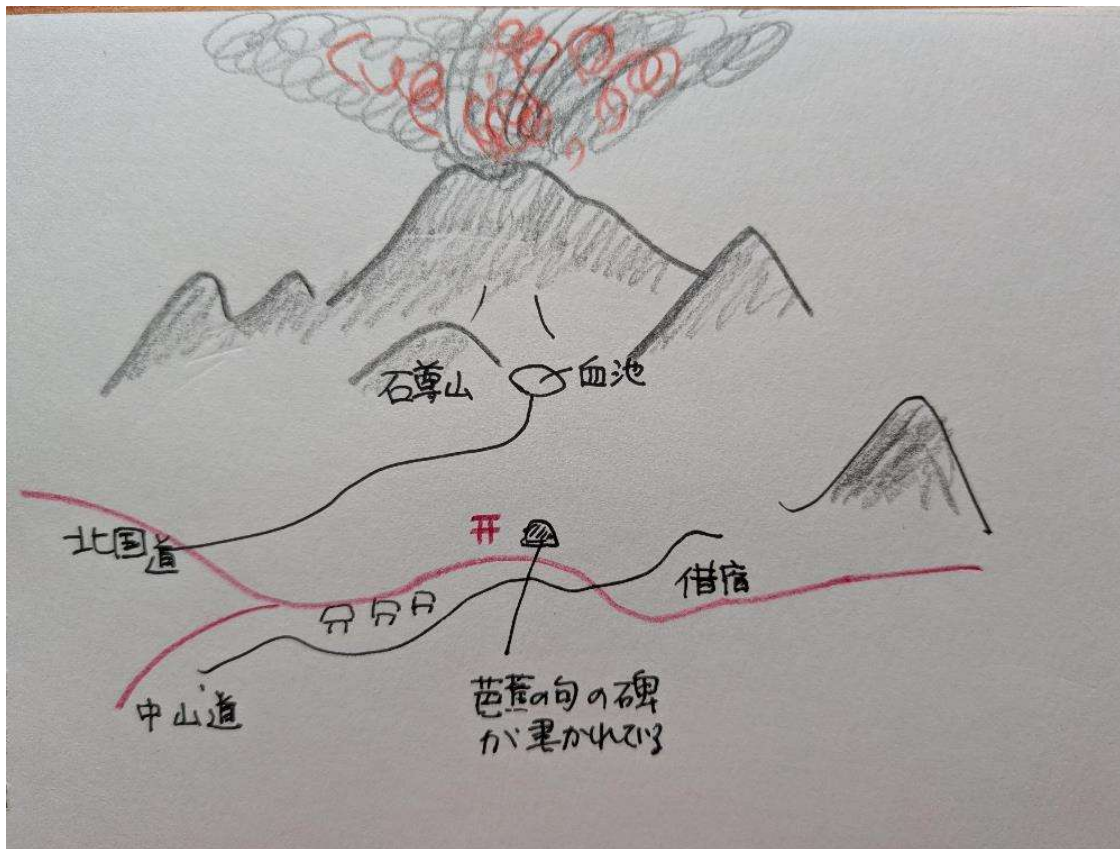
広瀬川・桃ノ木川の用水路も埋まる。関根では青柳大師さまが逃げろと警告

伊勢崎の戸谷塚では泥流の犠牲者の遺体がたくさん流れ着き、供養された

川を七分と三分に分かれている地点では、泥流は七分川を埋め尽くした。現在は三分川が本流

前木川岸（千代田町舞木）では川筋の色が青色に描かれている

天明三年浅間山大焼絵図の意図 三つ折りに持ち歩ける絵図



大噴火から30年以上たった頃、
多くの人に移動しながら噴火を
伝えるために作成されたと推定

絵は内田が模写。芭蕉の句の石
碑が書かれており書かれた年が
研究されている

天明の浅間押し・33回忌の記憶と意義

- 33回忌は「吊い上げ」故人の魂が完全に清められ極楽浄土に入る→新たな「区切り」
- 鎌原観音堂の三十三回忌供養塔、そして沙降記なども約30年後に書き写したといわれる
- 33年という歳月は、一区切りとして大事な記憶を残しておく。そして、新たな人生を賢明に生きることを目指す
- 私たちは、過去の災害を語り継ぎ、災害への備えと被害の最小化のために努力する必要がある



- 講師の先生方、追分宿郷土館の職員の方に深く感謝いたします